学園遍歴

渡辺美知夫

学園遍歴

渡辺美知夫

明治末年生まれの私には、寺小屋体験はもはやない。只、父から折にふれ聞かされたところによると、遠く南北朝時代に、私の先祖に三人兄弟があって、楠正成に従って湊川の戦いに従軍したが、敗戦の末、主領が自決してしまったため、郷里の河内へ引揚げるほかなくなった。ところが途中、武庫川を渡った辺りで、「悪党」生活の空しさを感じたものと見え、現在は尼崎市に編入されている大庄村という辺りで、士分を捨ててその地に定住することにしたらしい、というのである。首領と運命を共にせずに済んだのは、彼等が若手の下級将校であったためであろうと、これは私の想像である。

さてそこで、長兄は現在西宮市の一部になっている今津村で医者になったというのだが、これが私の先祖に当る。次兄と三番目は大庄村に留まって、一人は僧侶に、他は神官になったというのである。少々話が旨すぎるような気もするが、私の少年時代には、私の家は祖父が町医者であり、大庄村の二人の子孫も、夫々僧侶と神官として、祖先の業を継承していた。私の父は医業を継ぐことをせず、神官の家も、神官の仕事よりも、寺小屋の経営が主たる生活になっていて、連綿と先祖の業を継いだのは僧侶の家系だけで、現在も寺だけは立派に存続している。

私の生家は今津にあったので、墓も今津の共同墓地にあり、法事の度毎に父に代って、大庄村のお寺へ、「お詣り下さい」を言いに、私がよく使いに出されたものだが、戦争末期にその墓は西宮の広い墓苑に合葬されて、今日に至っている。私は当時旅順に在職していたので、合葬の現場に立合うことはできなかった。

さて、大庄村にある神官の家系の墓には、大きな石碑が建っていて、表面には「懿齋渡邊翁之墓」とあり、背面には細かい字で一面に「翁」の教育者としての功

績が、漢文態で記されている。翁の薫陶を受けた人達が建てた頌徳碑であることが察せられる。

それにつけて忘れられないことがある。私は前記のように、昭和八年四月以来終戦まで、丁度十五年間旅順の学校に勤めていて、終戦後しばらくして引揚船で「内地」に帰った。そしてやがて気付いたのは、懿齋先生の墓があまり顧られていないらしいことであった。そこでこれを西宮のわが家の墓に纏めてしまってはと考え、その家を継いでいた人に相談したところ、暫くして大庄村の人達が、それには絶対反対だということを告げられ、これには私も大いに感動して、即座に提案を取り下げた。そして今も双方の墓に、別々に折々のお詣りを続けている。そんなわけで、私は寺小屋というものに、何となく好意を感じ続けることになった。昨今の学校の荒廃ぶりを思うにつけても、寺小屋教育の良い面を、何とか現代にふさわしい姿で、復活させたいものと思わずにいられないのである。

さてもう一つ、私に経験のない教育機関がある。幼稚園である。私の学齢期といえば、大正の初期ということになるが、私の生まれ育った今津村には、当時幼稚園というものはなかった。従って私の学校生活の最初は小学校ということになる。私には数えで三つ違いの姉がいて、私の就学時には既に小学生として日々通学しており、私は正規に入学する以前から、姉の後について毎日のように小学校——今津尋常高等小学校——に通っていたのである。これが私の実質上の幼稚園教育であったと言えるかもしれない。そんな訳で、私は正式に入学する以前から、小学校にすっかり馴染み、先生方とも顔見知りであったのはもとより、姉の授業を廊下から眺めていたり、時には教室に這入りこんでいたりしたが、先生方も生徒の側も、一度も私を見咎めたり、追い出したりはしなかった。何とも應揚な時代だったのである。従って五月生まれの私が、数えの八才で正規の小学一年生になった時には、私には格別の感慨はなかった。(これと似た現象が、私の長男の場合にも起こることになるのだが、それは勿論遙かに後の話である。)

こうして見ると、私の生涯は物心づいて以来ずっと、学校との縁がいろいろの形で、繋がり続けていたことになる。不思議な縁(えにし)の糸を感じる。

さて、私は生来蒲柳の質ということで、祖父は私が五歳まで保つまいと言ったと、母は屢々私をからかっ

たものであった。そんな訳で私は年に数回は風邪で学校を休んだ。私が一日も休まなかったのは、小学四年生の一年間だけであったと覚えている。さりとて私は格別丈夫になりたいと、表立って考えたこともなかった。

尤もこの頃祖父は私に「朝起きぬけに、上半身裸になって庭に出て、これを振れ」と、自分の愛刀を私に手渡したものであった。虚弱体質の私を鍛えてやろうという意図があったのかも知れない。それは兎に角その刀は、私には些か長すぎ、重すぎた。抜いてみると鍔元が少し歪んでいる。これはどうしたことかと訊いたところ、その答えは、鳥羽伏見のいくさで、祖父はその刀を実戦に使ったのだと言う。これは大変なものを預かったなと思ったが、それから毎日のように振り続けているうちに、段々慣れて気持ちがよくなって来たものであった。そしてこれ又祖父の勧めで、小学校二年の頃から、私は剣道の稽古も小学校の道場で始めることになり、これはずっと後の高校卒業まで続いた。

今津の家が割合海に近かったためもあって、夏には毎日、時には午前と午後の二回海に行った。泳ぎを覚えたのは割合に遅くて、小学四年のある天気のよい日に、手のつく程度の深さのところを、四つん這いで、首だけ塩水の上に出して這っていたら、アサリか何かを掘った大きな穴があって、ズブ〳〵とのめり込んで、したたかに水を呑み、藻掻いた揚句に泳げるようになったように覚えている。その時穴にはまった途端、軀が仰向けになって、日の光がキラキラと射し込むのを、綺麗だなと思ったのを今も忘れない。それからは夏は毎日、照る日も雨の日も海に出掛けて泳いだ。雨の日は海の水が温かくて、陸に上がるのが億劫であった。小学校の先生方に連れられて、「海水浴」に行ったときには、和船に乗せられ、沖に連れて行かれて、いきなり海にほうり込まれたこともあったが、この時はもうすっかり泳ぎに慣れていたものだ。後にK学園尋常科では朝比奈という先生に水泳の指導を受けた。眞伝流という流派だと聞いた。

その外小学校時代には、草野球にも現を抜かした。守りはとにかく、打つ方は一向進歩しなかった。炎天下でやり過ぎて、脳貧血を起して慌てて帰る途中、気を失って倒れたら、そこが丁度堤になっていて、逆様にその土手をずり落ちるとその下が水田で、頭が水に漬かったせいか、暫くして気が付いた日もあった。

さて、五年生も末になったある日、私の身に一大事が起った。私は突然先生に呼び出された。私立K学園から先生が来て、テストをするから受験するようにということである。私には寝耳に水の話であった。親たちからも前以て何の話も聞かされていなかった。私は戸惑いながらテストを受けた。後で判ったことだが、口述試験をしたのはTという数学の先生であった。いきなり大きな懐中時計を取り出した先生は「この時計の長針と短針は、十二時から次に十二時になるまでに何回出会うか」と尋ねた。外に何を訊かれたかはすっかり忘れてしまったが、この時計の一件だけは、今でも胸を刺される思いで思い出す。正しい答えができなかったのだ。私はこれで、テッキリ試験は落第だと思った。外にも受験した者が数名いたので、そのうちの何人かが合格するものと私は思い、不意打ちのテストを恨んだ。ところが結果は私一人が選ばれることになったのである。不可解な思いで、私は得意にも何にもなれなかった。

この事件の結果、私は小学校の同窓生との付き合いを絶たれてしまうことになった。近頃初老中老の人達が、楽しそうに小学校の同窓会の噂をするのを聞かされる機会が少なくないのだが、その都度私は身の不運をかこっている。

さて、このテストに「合格」した結果、私の小学校生活は五年で打切りということになった。早教育とやらのモルモットにされたのである。小学校六年の正規の課程を全うしなかったということが、私の場合にはマイナスに作用した。「私は小学校も出ておりません」というのが、以後私の口癖になった。従って私は今でも早教育には原則的に反対である。早教育の結果、当事者の子供は「威張り屋」になるか（私は威張り屋が人間最低の人種だと思っている。）さもなくば私のように、劣等感を生涯の道連れにする虞（おそ）れがあると思うからである。

K学園中等部に入学してみると、私の外にもモルモットが数人居た。K学園は名うての金持学校ということになっていた。モルモット達はそこで授業料を免除された。これがまた私にはマイナスに作用した。家運が傾きかかっていたわが家では、これが魅力であったのかもしれないが、当人にはこれが負担になった。肩身が狭かった。

やがて私の恐れていたことが起こった。ある日の昼

休み、教室で級友みんなで昼食ということになり、私も母の持たせてくれた弁当を開いた。お菜がオカラであった。私はオカラが嫌いではない。ところがS君というのが逸早くそれを見付けて、大声でからかい始めた。骨太で肩幅の広い、しかし胸板の妙に薄い男であった。彼はオカラは人間の喰いものではないとか何とか、執拗にからかうのだが、外の級友たちは何故かその誘いには乗らなかった。私にはこれは忘れ難い経験ではあったが、後年いつかS君に会って、この件を昔語りの一話題にして、笑いあいたいものだと思うようになった。ところが間もなく彼が若死にしてしまったという噂を聞いた。残念である。

もう一つ私をガッカリさせたのは服装のことである。中学生になると、金ボタンの詰襟で、長ズボンになるのが当時の通則であった。私は格別それに憧れていたわけではなかったが、只そういうものだと思い込んでいた。ところが話は違った。K学園中学の制服はナント折襟の半ズボンであった。私は祖父が択んでくれる半襟半ズボンの少年服を着慣れていたので、中学生の詰襟長ズボンになんとなく期待のようなものを持っていたのかも知れない。そこへもう一つ追討ちがかかった。K学園は私の入学した次の年に、日本最初の七年制高等学校になり、中学部は尋常科と呼ばれることになったのである。折角尋常小学校を出て来たのに、またもや「尋常科」である。今思えば当時のK中学は随分進歩的な学校になろうとしていたと思われる。学校のモットーは「個性尊重」であった。これは思えば少なくとも半世紀早過ぎた。二年ほど経って、官立の高校を定年になった先生方が数人加わってから、この儘では大学に入れない、ということになったらしい。大学部を持たない悲しさ、官立の大学に進学するには、個性を尊重ばかりもしていられない、という空気が大勢を占めることになったものと見える。「個性尊重」は、私の感じでは一年余りで終った。その証拠にK学園中学校のK校長さんをはじめ、多くの特色ある先生方が、次々に栄転されたり辞められたりした。そのうちの幾人かとは、私は後々まで御縁を続けたものである。

ところで茲でもう一つ、私のヤレヤレと思ったことがある。私が中学に入った次の年に、K中学は七年制高等学校になったこと、前記の通りであるが、それにつけ、尋常科編入のために、又もや試験があった。勿

論大部分はパスしたが、中学課程に留め置かれた者も数名いた。その人達のことを私は今も忘れない。一緒に授業は受けながら、何とも気の毒に思ったからである。私は現在も入学試験というものに強い反感を持っていて、この制度は何とか絶滅させるべきだと思っている。その因は尋常科編入試験にあった。

中学部に留め置かれた少数の中に、N君がいた。彼の住む屋敷が運動場の南東方にハッキリと望み見られた。広々とした庭園の、築山の頂きに、亭々たる老松が数本かたまっていた。親父さんはなんでも世に聞こえた紡績会社の社長さんだということであった。そのN君はサッカーに熱中していたが、そのうちにドイツとかに留学するということで、姿を消してしまった。もう一人気の毒だったのはT君である。私が年賀状に「希望」と書いて送ったら、「俺には希望なんてないんだ」と怒気を含んだ返事が返って来た。彼は数年後結核で亡くなってしまった。前記の、私の弁当のおかずをしつこくからかったS君も、中学部留めおきの一人であった。

尋常科の課程で強く印象に残っていることが幾つかある。一つはMrs. Craggというカナダ人の先生に、尋常科高等科を通じて、七年間お世話になったことである。関西学院の神学部教授の奥さんだということであったが、長身の美しい方であった。Robert Browningの*Pippa Passes*だのAlfred Tennysonの短詩などを、闇雲に覚えさせられたのを、後になって「あゝ、あの詩人のこの詩だったのか」と思い当たらせてくれた経験は、楽しく貴重であった。讃美歌というものを幾つか覚えて、歌えるようにもなった。たしか尋常科三年のとき、後に西洋史殊にルネサンス研究者になったS君と、国語学者になったI君と三人で、先生に招かれて仁川(にがわ)にあった先生のお宅に伺ったことがあった。紅茶を御馳走になって、紅茶というものは砂糖もミルクも入れずに飲むのが、本当の味わい方だと教わった。日本のお茶と同じだなと思った。齢頃のお嬢さんと一緒に写真をとることになった。私は祖父からイーストマンコダックの手提げカメラを持たされていたのである。その時先生がお嬢さんに“Don't grin.”と注意したのを聞いて、grinて何だと思い、帰って辞書を引いたら「歯をむき出して笑ふ」と書いてあった。とにかくこの先生には、付かず離れずの間柄ながら、毎週の英会話の時間に、何か教わることがあった。とりわけ

後年まで深い印象が残ったのは、Seven deadly sins (七つの大罪)——つまりpride, covetousness, lust, anger, gluttony, envy, slothの話、殊にその筆頭のprideのことであった。今手許の研究社大英辞典をあけてみると、(1)にある訳語は自負、うぬぼれ、思い上がりであり、自尊心、プライドは(3)にしか出てこない。私はこのことから、英語の単語には正反対の意味を含むことばが、往々にしてあることに気付かされた。単一の語が正反対の意味を、同時に持っていることに深い感銘を覚えたのである。後に発見したもう一つの例は、exploitationである。第一に挙がっている意味は「開発」であり、次に「搾取」とある。昔引き慣れた辞書には、筆頭に「偉業」とあり、最後の六番目に「搾取」とあった。このことは私の場合、自然科学的用語である「仮設」あるいは「仮説」の問題に連なるのだが、詳しくは此処では語るいとまがない。

英語の授業では外に、東大英文科を明治四十年に出て、そのあと一年間Oxfordに留学したというS先生のクラスで読んだLafcadio Hearnの*Life and Literature*というのが印象に残っている。ハードカヴァーのチャンとした本で、北星堂の出版であった。これは今も装幀を変えて続刊されているようだ。この本からは当時の日本の行き方に対する、情緒的批判とでも云うべき印象を強く受け、詩とか文学の世界の意義を汲みとらされた。この著者に対する憧れは今も消えていない。これと対照的に、理知的にショックを受けたのはH. G. Wellsの*Probable Future of Mankind*という、研究社刊の赤い装幀の教科書版であった。近い将来戦争になった場合、一番安全なのは最前線の塹壕の中だろうとか、人類はそのうちに地球上到る処に移動するようになる筈だから、例えばNew Yorkあたりに、全人類の戸籍簿を備えるがよろしかろうとか、当時の私に目を見張らさせるような「卓見」が、随処に跳び出してくる本であった。そうかと思うと、京大英文科出身で、上田敏に可愛がられたというH先生は、John Keatsの短詩を集めた、薄い小型本とか、*Rambles*何とかという自然観察のessay集などを、わざわざイギリスから取寄せて、高等科三年の一年間、次々に読み進まれた。英文科志望の者たちは御機嫌であったが、経済や法科を志す、クラスの大多数を占める者達には大いに不評であったのは無理もない。この先生に数年後文部省からイギリス出張の達しがあったと聞

いて、級友何人かとお宅を訪ねたが、その時の私共の「イギリスでは何をなさるお積りですか」という問に、「この歳になって、今更勉強でもあるまい。オランダに行ってチューリップの球根でも手に入れて来るか」と応じられたのには、いかにもこの先生らしいなと、感服したものであった。オランダがチューリップ栽培の本場だということも、私は初めてこの時教わった。先生はその後、私の旅順時代に、信州松本に隠棲されたと聞き、一度お訪ねしたいものと思い続けながら、遂に果たさなかった。

高等科三年といえば John Stuart Mill の *On Liberty* には手を焼いた。凝った文章が難解な上に、内容もむつかしくて閉口したが、経済法科組は喜んだようである。手を焼きついでにもう一つ挙げると、Thomas Carlyle の *Sartor Resertus* である。読み解く実力があれば、当時の身の振り方に大いに参考になったものを、現実にはドイツ語張りの英語に難渋した記憶しかない。それにしても昔は高等学校で、随分固いものを当てがわれたものだなと、思わずにいられない。

尋常科時代で更に思い出すのは、後に大阪商大に移られたK先生のクラスのことである。教科書の本文のあとに Exercise という欄があり、格言が幾つか列記してあった。その中の One thing at a time. という句のところで、生徒の机の間を廻っていた先生が、丁度私の脇に来かかって、軽く机を叩きながら「君はこれで行くことだな」と仰言ったものだ。先生にどういう意図があったものかは、今となっては確かめようもないが、私はそのヒントを何故か深刻に受けとめた。余技というものをなるべく持たないようにと心掛ける癖は、このときの衝撃のせいである。

更にもうお一人挙げると、高知県出身で、コロンビヤ大学か何処か、アメリカの大学卒業のS先生である。一枝というお名前が「女の子みたいだ」と呟いたら、「私の家は両親がクリスチャンで、この名前も聖書から出ている」と仰言られて、恐縮したものであった。この先生とは、先生がお亡くなりになるまで御縁が続いた。今思えば成城あたりの一望畑だった中に家をお建てになって、私がお訪ねしたとき、掘り炬燵の工事をしてらして、私もいささかお手伝いをした日もあった。尋常科四年の時であったか、その時既に別の学校に移っておられた筈の先生が、私を呼び出して佐原へ連れて行って下さった。伊能忠敬の生家を訪ね、忠敬が

生涯をかけた測量の仕事に使った器具類の陳列してある資料室などを見学した。私にとって全く新しい分野に接する感動を覚えた。先生は後に忠敬の偉業に関する英文の大著を送って下さったが、そうした資料や写眞の類も、殆ど全部を引揚げの際置き去りにせざるを得なかったのは、詮方ない仕儀ではあるが、心残りである。

高等学校の課程は三年ときまっていたから、尋常科は四年ということになる。当時普通の中学は五年という決まりであったから、私はここでも一年端折らされることになった。これはいかんと私は思った。何をやっても愚図で、早いことのできない自分の性質を認めざるを得なかったからである。どこかでゆっくりしなければ、と私は思い続けることになった。

高等科は私は文科甲類を選んだ。甲類とは英語を第一外国語にする、ということである。母は私が祖父の業（わざ）、つまり医業を継ぐことを秘かに希っていたらしいし、学園の理事長もモルモット達が医学部に進むことを、強く勧めていたらしい形跡があるのだが、私は別にそういう要請を直接受けた覚えがない。実は私は尋常科四年のとき、今津の唯一軒の書店での立読みで、福原麟太郎『英文学の輪廓』という本を開けて、P.B. Shelley の *Ode to the West Wind* に遭遇し、何故ともなく感動していたのである。

高等科三年を通じて私は憂鬱であった。「人生不可解」病に、人並みに私も罹っていた。K学園での生活が、劣等感をいやが上に助長する質のものであったことが、原因の一部であったかも知れない。ある日哲学担当のF先生に呼び出されて、いきなり「君は自殺するんじゃないか」と糺（ただ）された。正直私はそこまで思い詰めてはいなかったので、ひどく驚いた。「そうか、そういう風に俺は見えてるのか」と、私は更めて自分を見直した。（F先生はその後、私の大学在学中に胃の病気で亡くなられたと聞いた。）

その頃「思想善導」とやらで、先生方は文部省から、生徒達を自宅に呼んで「善導」するようにと、申し付かっておられたらしく、ある日私たちはドイツ語のI先生のお宅に呼ばれた。ドイツ語は私も第二外国語として択んではいたが、I先生には格別の親しみは、実はなかった。ところがその日先生は私達に「歎異抄」の話をして下さったのである。私は眞宗の家に生まれながら、その日まで親鸞のこと、ましてや歎異抄のこ

となど、何の心得もなかった。I先生は実は歎異抄の名独訳者だったのである。私は早速書店に駆けつけて、当時発刊間もなかった岩波文庫の中から一本を択んだ。星一つ、金二十銭であった。その一冊はボロボロになった姿で、未だに私の書架の一隅にある。

この本の中で、私の胸撃たれた個処は数々ある中に、巻末近くに現れた

よろづのことみなもてそらごとたわごと
まことあることなきに

という一句にはハタと当惑した。すべてのことが悉く虚事たわごとであるとすれば、俺は一体何のために今勉強し、これからも大学に進学しようとするのか。今迄の漠然たる憂鬱が、このとき一つの核を得て、事を明確にするよう迫って来るのが感じられた。言うまでもなく、これに私なりの答えを出すのには暇が要った。

そのうちに私もやがて最上級生になり、大阪高校から今で云う非常勤講師として来て下さっていた、Y先生の万葉集の講義が始まった。金曜日の第一時限であった。私の当時の心境として、その講義に格別打ち込んだという覚えはなかったのだが、ある金曜日たまたま私は例によって風邪のため学校を休んだ。ところが次の週の金曜日に、私はそのY先生に呼び出された。「私はお前の顔を見るのが楽しみで、この講義に来てるんだ。休むな」という先生の御託宣である。先のF先生の場合とは違った意味で、私は驚いた。これは病気などしていられないな、と思った。自殺は論外ということになった。

更にもう一つ、此の世に未練の生じる講義があった。大阪市内の漢学塾の塾頭であったZ先生の唐詩選の講義である。私にはこの講義に接するまで、漢詩というものは何となく大雑把で、妙に肩肘張った、武張った、誇張の多いもののように感じられて、何となく敬遠気味であったのだが、この講義のお蔭で中国の詩の嫋々たる余韻に触れた想いがしたものである。

長安一片月　長安　一片の月
萬戸擣衣声　萬戸　衣を擣つの聲
秋風吹不盡　秋風　吹いて盡きず
総是玉関情　総じて是れ玉関の情
何日平故虜　何れの日にか故虜を平げて
良人罷遠征　良人遠征を罷めん

これは唐詩選冒頭の一曲で、題は子夜呉歌、作者は李白とある。子夜は晉の女子の名と註にある。先頃の長く苛烈な戦争の間に、夫や子を送り出した妻たちの情を想わずにいられないではないか。Z先生はまた、詩一つを読み了えると、必ずそのあとそれを現代中国音で、通し読みして下さった。中国音て美しいなと思った。

当時のいわゆる旧制高校では、高校卒業だけで学校生活を打切る者はいなかった。尤も一人だけ例外がいた。K学園の南方の、魚崎という処に家のあったK君である。ある日体操の時間、運動場に出ていたら、突然火事を知らせる半鐘が鳴り出した。どうやら魚崎の見当らしいというので、クラス全体がその方角に駆け出した。行き着いてみると、K君の家がすっかり焼け落ちていた。広い屋敷の眞中で、礎石の上に熾がまだ燻っていて、赤い火がチョロチョロと見え、煙が薄く棚引いていた。家人が全部出拂っていた間のことだということであった。K君のショックは大きかった。彼は高校を出ると、大学には進学せずに満州に渡り、満鉄の下級社員になったという噂であった。その後私の旅順在勤中に、只一度K君から電話がかかったことがあったが、会ったわけではなく、その後はその儘になってしまった。心残りである。

そんな訳で、高校生は大学に進学するのが当たり前ということになっていて、私もその傾向に異を立てるほど、しっかりした考えがあったわけではなかった。同級のI君が京都の英文科に行くというので、私も同調しようかとも思ったが、私にとって京都の街は気の散るところが多過ぎる気がした。私は小学校の頃から、甘党の父の言い付けで、大阪や京都のお菓子屋へ、名物のお菓子を買いに行かされることが、チョイチョイあって、多少勝手がわかっていたのである。それに実は私は高校二年の夏、祖父の関係の遠縁の国語学者が、湘南に住んでいたのを頼って、十日ほど居候をして東京の街をあちこち見学して廻っていた。東京の街は私にはひどく乱雑に見えた。この時の経験が私に教えたのは、東京の街はうかうかと歩いていると、飛んでもない処へ連れて行かれる、つまり東京の街路は関西と違って放射状になっていて、しかもそれが整然としてはいないということであった。中でも私の気に入らなかったのが電線の張り方である。関西の、例えば大阪にしても神戸にしても、電線は整然と、キチンと張っ

てある。それに引替え東京の街の電線の張り方はデタラメで、殊に気に障ったのは、電柱が歩道の眞中に立っていることであった。私は東京の街が、しっかりした都市計画に基づいた、キチンとした街ではないことを思い知らされ、こういう街ならむやみに出歩く気にもならず、貧乏書生は勉強に集中できるだろうと思った。

こんな他愛もない理由で、私は東京に出ることにしたが、もう一つ動機が加わった。私がある日通学のため、阪神電車のプラットホームに立っていたら、そこへ知り合いのおばさんが現われて、言葉を交していると、一足遅れて父の友人の詩人がやって来た。私が挨拶すると、おばさんが「あの人なにする人や」と訊くので、私は「詩人や」と答えた。おばさんは「詩人て何や」と尋ねた。私が返事に困っていると、「あの人月給なんぼや」と来た。私はこれで関西に見切りをつける気になった。

東京帝国大学文学部は、昭和四年度四百名を募集するという知らせがあって、その後暫くして応募者が三百七十数名であることが判った。それなら応募者は全員入学可能ということになる。私はホッとした。今度こそ入学試験を受けなくて済むと思った。ところがその後、国文科だか社会学科だかと、英吉利文学科は定員超過のため、入学試験をすると言って来た。しかしこれなら、従令(たとえ)英文科の試験に落ちても、どこかの科には拾って貰える訳だろうと、私の心の緊張はやや弛んだ。そこへ今度は文学部事務室から、志望学科届け出のための書類が送られて来た。その文面には、文学部には十九の学科があるので、志望順に一から十九まで学科名を記入するように、とのことである。一番から精々五、六番目までは、何とか根拠のある返事ができるにせよ、十九番目を何学科にするかなどとなると、これはもう当てずっぽうになって仕舞うがなと、私は憤慨したが、ともかくも書類には記入しなければならない。一番は英文科、これは動かない。尤も英文科とは俗称で、正式には英吉利文学科というのだそうだ。二番目は「支那哲学」、その次は「支那文学」にした。親類に漢詩を嗜(たしな)む人と国語学者がいた影響である。その後をどうしたかは、もうサッパリ記憶にないが、只十九番目をどうするかについては、些かいきさつがあった。Bertrand Russell の言うところによれば、諸科学は人間から一番遠い所から始まって、それから

段々人間に近付いて来たという。天文学――地質学・地理学――動植物学、次いで人間の肉体、そして最後が人間のココロと云うわけである。私はこの説をなるほどと思ったが、只一つハテナと思ったのは、天文学から医学までは、人間のココロが客体として捉えることが、自然に納得できるが、本来主体である筈の人間のココロを、客体化することができるのか。ココロは本来主体なのだから、それを客体として捉えたら、ココロの本質をいきなり取り違えることになるのではないか、と迷った。そこで私は十九番目に心理学科を置いた。ところがその後漱石全集の一巻で、漱石の蔵書目録をパラパラとめくって、そこに心理学関係の本が沢山載っているのを発見して、しまったと胸を叩いたことであった。

私は英吉利文学科の試験を、いい加減な気持で受けた。私のすぐうしろの席に、後にVirginia Woolfの研究家になり、私にとって数少ない友の一人となったY君がいて、この人は出来るなと、何となく思ったのを、後に彼に打明けたら、彼は只おとなしく笑い流しただけであった。もう一つ覚えているのは、試験の監督として、高い教壇の上の、異様に背の高い椅子にかけていた、支那文学のS先生が、悠々と居眠りをしておられたことである。流石は大学だなと私は思った。

私が大学を受験した昭和四年、一九二九年といえば、十月に起った、かの悪名高いアメリカ大恐慌を頂点とする、世界的不景気のどん底時代であった。翌五年十一月には民政党の浜口首相が暗殺され、彼が信頼して蔵相に起用した井上準之助も、昭和七年二月狙撃されて即死した。緊縮政策が世相を一層暗くしたことは否定できないとしても、私はこの二人は決死の覚悟で国運を建て直そうとしたものの、時運彼等に組せず、非業の死を遂げたものと、未だに痛恨の思いを禁じ得ない。彼等とは正反対の経済政策をとった、政友会の高橋是清蔵相も、やがて昭和十一年二月の二・二六事件で殺害されている。七年にはもう一つ、五・一五事件というのがあった。この時射殺された犬養毅首相が、襲撃した陸海軍の将校たちに言ったという「話せば判る」という言葉は、その後軍人側の「問答無用」というセリフと共に、流行語になったものであった。その前年の昭和六年後半には満州事変が起っていた。これは翌年には上海にまで拡大、やがて本格的な日中戦争となって、泥沼化して行くことになる。この頃国内で

は東北地方が毎年のように凶作に見舞われ、娘の身売り騒ぎが屢々新聞に載った。工場や交通関係でも「労働争議」が頻発していた。

このように荒(すさ)んだ世相の中で、私は大学生活を送った。この間何を思い、何をなしたか、更めてじっくり想い起してみたいと思っている。

（一九九八・一・二五）